

西光

第 12 号

百橋山 西光寺

高岡市京町一〇一・二五
電話 (〇七六六) 二二一・二九七一
FAX (〇七六六) 二二一・三二七〇
平成十年九月二三日

世紀末?

二十世紀もあと一年半、どうも日本も世界の良くないことが多すぎる。毎日の新聞テレビで見ると、経済の動向として、不景気による倒産やリストラから、金融不安に株の暴落など。無責任な大銀行の幹部や役人の不祥事も後を絶たない。また巷には子供たちのいじめによる自殺から、毒薬による無差別殺人事件の続発まで。それに加えて自然までもが追い打ちをかける。梅雨は明けず、洪水や地震までもが、まるで人間をあざ笑うように傍若無人な振る舞い。挙げ句の果ては海の向こうからはミサイルまでもが飛んでくる。世も末とはこういうのを言うのである。まさに世紀末的な状況である。いや末法と言うべきか。こうなると情けないが、亀のようにじっと首を縮めて堪えるしかないように思われてくる。鶴は千年、亀は万年と強がりも言っても詮方なく、あと何年耐えなければならぬかと指を折って数えてみる。資産や貯金は目減りし、年金は破綻の心配があり、そうすると将来の生活設計は、老い先長い老後の介護は、などなど先行き不安が蔓延しており、将来に容易に明るさが見えない。親鸞聖人の和讃の中で、西本願寺系の方がよく唱えるものに「無明長夜の燈炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」(正像末和讃)があるものの、なんとなく耳に虚ろに聞こえる。なんとかなればこんな事態を招いたのは自分のせいじゃない、自分には関係ないと思態をついて怒鳴り返したくなるからだ。今自分にとって必要なものはなにか、なにをなさねばならないか、どうしたらよいのか、さっぱり分かってこない。イライラのみが募ってくる。

さてここまで書いてようやく胸のつかえがとれかかったところで、静かに自省すれば、そこには何よりも可愛い自分の姿が見えてくる。この娑婆世界に生きて、とにかくこの苦境からなんとか先の明るさが見えてほしいと思う。せめて自分だけでもと欲を突っ張らせる。さらに責任は自分にはないと主張する。やっぱり自分にとって自分が一番大切なものだと思える。しかし落ち着いて考えてみると、これが我執であり、煩惱であると思えてくる。だが一方で生きている限り煩惱を断ずるなどとはほとんど不可能な自分、それでいて一方世界で一番大切な自分がある。この後ろめたい気分をなんとか正当化しようと静かに仏典を紐解いてみる。なんと原始仏典の中に、釋迦の発言としてこんな言葉がある。「どの方向に心で捜し求めてみても、自分よりさらに愛しいものはどこにも見出されない。そのように、他人にとつてもそれぞれの自己は愛しい。だから(自分を愛するために)他人を傷つけてはならない。」(ウダーナヴァルガ「五・一八」)我が、意を得たりと喜んだのは釋迦の発言のはじめのところを読んだからで、よくよく見ると釋迦の真意は最後の「他人を傷つけてはならない」にあることは明白である。生きとしけるものはすべてなによりも自分が愛しい。だからそのことを自分の身に引き当てて考え、他人を尊重し、他人の幸福を思いやり、まして傷つけてはならないのである。もちろん殺傷してはならない。今世界には戦争や憎しみが横溢し、各地で宗教戦争や民族戦争が多発している。すべての事象は過ぎ去ってゆく無常の世界であることを忘れ、現在の自分にこだわらず、自分だけの、自分たちだけの利害に固執して憚らない。武器や憎しみは他人のみならず、やがて自分の幸福をも奪って、さらなる憎しみと破壊を呼ぶ。煩惱具足の我らながら、少なくともすべてを我が身に引き当てて考え、他人を傷つける

ことのないように心がけたい。だが親鸞聖人はさらに心の奥底を覗かれる。人は心ならずとも誤ってひとを殺めるかもしれない。否、そのような非情な業にあたればどんな人でも宿業の中に殺傷を重ねてゆかねばならない。どうにもならない自分の真実を理解してくれるものはない。いかなる行をも及びがたき身である。親鸞はそこで生かされている自分の真実を受け止めてくれるものは如来の本願しかない。真宗の本願念仏をお説きになった。釋迦の優しさと親鸞の厳しさが響き合った。すべては自分から始まっているのである。

《標語》

「聞く耳を持つものに不死の門は開かれた。それぞれに信をおこせ。」(相應部經典六・一・一・一二)
奈良康明氏(「原始仏典の世界」NHKライブラリー)の実に味わい深い解説によると、「不死とは悟りのことです。仏教の、いやインドの宗教伝承では解脱、悟りをしばしば不死と表現します。肉体的に死なないことではありません。有限のこの身そのままに、真実にふれ、真実に包まれていることを自覚し、真実にお任せして生きていけるところに感得する宗教的な永遠性の自覚のことです。(中略)信はよろこびをもたらすものです。真実、つまり法、に出会いつつ生きることは真実に生かされて生きることです。ひとたび、それが実感されたひとには、信をもって生きる人生に信仰のよろこびが生じます。」
釋迦が長い苦行の末に悟りを開かれて、鹿野苑において初めて人に向かって自らの悟りを説法された時の最初の言葉である。「弥陀の本願信ずべし」「弥陀の無量壽菩薩」とうたわれた親鸞聖人となんとよく通ずる言葉であろうか。法然上人に出会い、本願念仏の法に眼をさされた聖人の自覚とよろこびの胸中を推し量るべきであろう。

《仏教豆知識》

「色」 般若心経の中で「色即是空、空即是色」という言葉で有名な「色」とは、広義には五蘊、すなわち色受想行識(色＝物質、受＝感覚、想＝知覚、行＝意志その他の心の作用、識＝心識)、の一つとしての物質的存在のこと。狭義には眼によって見ることで「いろ」と「かたち」である。つまり我々が目の前に確かだとして見ている物質の世界は永遠に不滅・不変なものではなく、空(＝縁起の法によって生起する現象)にすぎない。

《行事予定》

一月一日・二日・三日	修正会		
一月八日	法話会(初お講)	(講師 大宝寺 龍本茂樹師)	
三月八日	法話会	(講師 大宝寺 龍本茂樹師)	
毎月八日	法話会	(講師 大宝寺 龍本茂樹師)	
七月一四日・一五日	お盆(新盆)		
八月七日・八日	永代祠堂経会	(講師 光専寺 葉室文昭師)	
八月一四日・一五日	お盆(旧盆)		
十月八日・九日	報恩講	(講師 長福寺 藤井 乗師)	
十一月八日	法話会(終お講)	(講師 光専寺 葉室文昭師)	
十一月二十七日	御正忌	(講師 願浄寺 嶼 秀誠師)	
十二月三十一日	除夜勤行・除夜の鐘		